

5 大和川にかかる橋 その2 村の中に架けられた「農通橋」

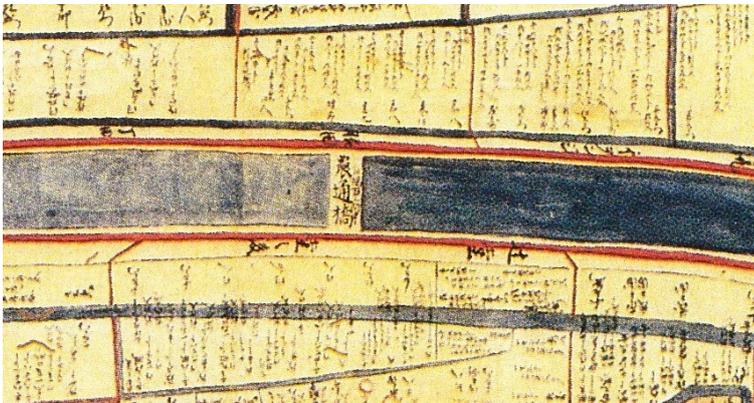


図1 農通橋(河内国志紀郡大井村絵図)安政3年(1856年) (資料2:第十巻)



図2 「農通橋」想定地

国道170号線新大井橋の上流約400mのところに、昭和の初めごろまで、藤井寺市大井と川北を結ぶ橋がありました。

今から約310年前の宝永元年(1704)に付替えられた大和川によって志紀郡大井村(現藤井寺市大井)は、南の集落と北の耕作地に二分され、耕作地へ行くためには大変な不便と困難が生じました。村の中を自由に行き来できる橋を架けることは人々の悲願でした。

(1) 徒歩で川を渡る「徒歩渡」

付替え後、人が川を渡るのは、徒歩又は舟でした。中・東高野街道など主要な街道筋には、舟着場や舟乗場の舟渡場が整備され、舟賃を払って舟で川を渡っていました。そのほかは、徒歩で川を渡っていました。大和川は幅が200m近くもある大川ですから、大雨による洪水や寒中の時などは、土地の人でも立ちすくんでしまいます。村人たちは、どんなふうに渡っていたのでしょうか。

天保末年(1840年頃)頃に作成されたと伝わる「旧大和川跡略図」(図3参照)による

と、大井村の北に「幅百間(約 180m)の歩行渡」がありました。人足が板の上に人や荷物を載せて渡る渡し場があったのでしょうか、それとも、中洲の川底の浅いところを選んで渡るルートのことだったのでしょうか。残念ながら、渡る様子の記録は残されていません。

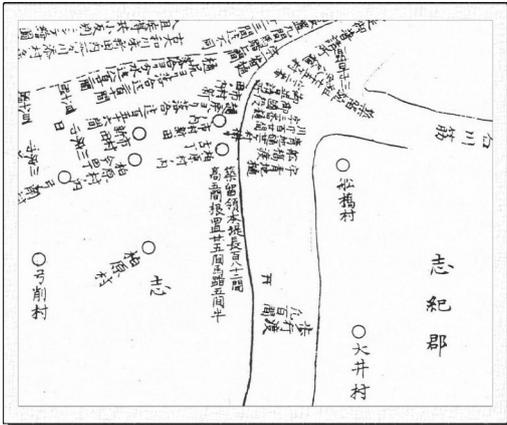


図3 歩行渡(舊大和川跡略圖 天保末年)(資料1)

(2) 下流の村に「野通橋」

付替えから数十年経った頃、下流の丹比郡(現松原市付近)の村では、大和川を渡って耕作地に行くための「野通橋」(注1)が架けられました。橋といっても、あまり丈夫なものではなく、洪水の際には流されるような簡易なものだったようです。

明和7年(1770)頃の大和川の状況を描いた「大和川筋図巻」によると、丹比郡の3ヶ所に「野通橋」が架けられていたことが確認できます。しかし、大井村には、まだ、この時期、橋はかけられていなかったようです。

(3) 大井村にも「農通橋」

その後、年代は不明ですが、大井村にも「農道板橋」が架けられ、「農通橋」と呼ばれました。天保14年(1843)、大井村から藩役所に提出した「河内国志紀郡大井村明細帳」には、大井村に「農道板橋」壱力所が架けられていたとの記録があります。橋の長さは「川幅と同じ102間半(約185m)」。修復料として「銀500匁(注2 約50万円超)が公儀より与えられ、必要な根杭材や人足賃も支給された」と記録されています。安政3年(1856)作成の「大井村絵図」(図1参照)には、現在の大井3丁目誓願寺の北と川北3丁目の南を結ぶ「農通橋」が描かれています。ずいぶん立派な橋にみえます。

嵩む修復費用

村人の悲願かなって架けられた橋でしたが、大雨のたびに橋が浮き、渡ることもできない状況がたびたびあったそうです。

幕末の慶応年間になると、橋の維持経費が毎年多額にのぼり、護岸のために柳2万本を挿す人足、堤修復費用など「大和川のおかげで多額の物入りが嵩んできている」と村役人が嘆かざるを得ない状況でした。そのうえ、大井村は、何回となく大和川決壊によ

る家屋、農作物の被害をうけましたので、村人の困窮は悲惨の極に達していたそうです。

木橋に架け替え

明治になると、各地の橋は歩くための道路から荷車、荷馬車で荷物を運ぶための道路に整備され、この「農通橋」もしっかりとした木橋(図4参照)につけかえられました。地元では「大井橋」と呼ばれていたようですが、命名に関する資料は見当たりません。

この橋は、明治9年「大井村橋梁樋管堤防明細表」によると、「長さ百間、幅4尺(約1.30m)、高さ1間半(約2.7m)」ありました。しかし、この時代は「皆民費ヲ架之」、即ち、費用は全額地元負担でした。

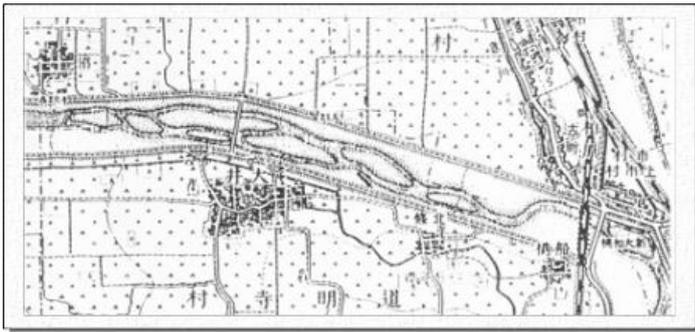


図4 農通橋(明治41年測量図)(資料2:第10巻)

(4) 「大井橋」から「新大井橋」へ

昭和になると、車時代に対応した橋の整備が全国で進み、この「橋」は、昭和11年(1936)、下流約400mのところに、2車線のコンクリート製の「大井橋」として新たに架けられました。

さらに、上流約600メートルのところに昭和13年(1938)に「河内橋」が架けられ、河内の南北を結ぶ交通網が整えられました。昭和45年(1970)、大阪万国博覧会にあわせて国道170号線の整備が行われた時に「大井橋」のすぐ東隣に四車線の現在の「新大井橋」が架けられました。河内の南北を結ぶ主要幹線道路になっている「新大井橋」のルーツは、村民が苦勞して維持し、守ってきた「農通橋」だったのです。

(2016/8 勝部)



図5 左:新大井橋

(注1)「野通橋」は「やどおりばし」、「農通」は「のうどおりばし」。資料にはふり仮名が無いので正確な呼び名はわかりませんが、他の地域の地名例などから推測しました。

(注2)「1両 6 万円」として換算。日本銀行 HP「貨幣博物館」によると「江戸中期～後期は、1両は4～6万円」。江戸時代は貨幣価値の変動が激しく、時代によって換算率が難しく、諸説有るそうです。

(参考資料)

資料1 「大阪府誌」第四編(1970)

資料2 「藤井寺市史」

第二巻通史編二(2002)

第六巻資料編四中(1988)

第十巻資料編八上(1991)

資料3 「柏原市史」第三巻(1972)

資料4 堺市博物館編「大和川筋図巻をよむ」堺市博物館(2015)

資料5 中九兵衛「甚兵衛と大和川」(2004)

資料6 天野寿男他編「大和川付替えと流域環境の変遷」(株)古今書院(2008)